

「科学」の立ち位置
—ICJ 国際捕鯨裁判に関連して—

最初に、日本水産学会が行った国際捕鯨裁判に関するシンポジウムでの私の発言について書く。管理人の発言は、閉会の挨拶として行ったものであり、シンポジウムの中での議論とは直接関係がない。判決を読む限り、昨年の ICJ 国際捕鯨裁判の判決は、科学調査そのものの妥当性について結論したものではなくて、科学調査の手続き論（科学調査と認める手続き）についてだから、政治的のその結論を利用しようとするのでなければ、論理的には彼もあまり気にすることはないだろう。ということで、それについて、大げさに議論する気にもならないし、シンポジウムをどうしてもやらなければならないとは思わない（水産学会として何かをやらざるを得ないという社会的立場の問題を考えなければ）。そうではなくて、科学委員会と IWC 総会、あるいは、国際合意というものについて考えたいのである。

発言の冒頭で述べたことは、「科学者は正義を語ってはいけない。」ということである。私には、この発言が当たり前の認識として受け入れられるのか、論外の発言と人々に受け取られるのかよくわからない。私としては当たり前のことを言っているつもりである。もちろん人には倫理観や正義感があるから、それにしたがって人々が行動することは悪いことではない。しかし、何を正義とするかは人によって多様であり、その妥当性は経験によって反証可能ではない。つまり、実際にその妥当性を検証することができない。だから、正義は科学的命題にはなりえない。個人の発言として正義を口にしても構わないのだが、科学者としてそれを言うてはいけない。科学とは経験的な認識のことであり、経験された事実を理論化・抽象化したものだから、事実によってその理論の妥当性を検証していかなくてはならない。正義はおそらく人の中で絶対的なものだろうから、「正義」を口にすれば、事実ではなくて、「正義」によって理論を構築したと取られる。だから、科学者が科学者として発現するとき、いかなる場合にも正義を口にしてはいけない。

さて、ここからが問題なのだが、多くの政治的な決定には、科学情報が重要な要素として使われる。マスコミ人などあまり教養のない人は、これを科学が正しいからだと思っている。しかし、科学者が努力していることは、今わかっていないことをどのように認識するかだから、科学はしばしば間違える。しばしば間違えるにもかかわらず科学的認識がそれなりに尊重されるのは、それが「正義」を口にしないからである。つまり、間違えていたにしても、それが特定の立場を支持する目的で発現されていないので、合意を作るうえで一つの基盤になると考えるからである。つまり、科学者が正義を口にすれば、その時点で、科学者は科学者としての社会的責任を失う。

その意味では、IWC の科学委員会の態度は極めて尊敬に値する。反捕鯨国の科学者も科学委員会のメンバーであるが、彼らは出身国が主張する「正義」とは離れて、科学を論じ

ている。もっとも、最近では、科学委員会の外側で、捕鯨反対論を述べている人の中には、相手の主張の動機に対する歪んだ主張を記述したり、怪しげな「科学者」も少なくない。また、そのような主張をチェックすることなく科学雑誌への掲載を認めてしまう、かなり危ない編集者もいる。しかし、そういう人はいつでもいるし、捕鯨論争に限ったことでもない。自分と結論が違う科学者に対して、事実の記述内容とその集約の仕方、そこからの論理の構築について糺すのではなくて、政府に雇われた御用学者とか、ある団体の代弁者等々、口汚く相手の立場を攻撃する「科学者」がいるが、こういう論争を心から好むマスコミ人にとっては大切な人かもしれないが、科学コミュニティからはやがて排除されるだろうから、あまり気にすることはないかもしれない。

さて、問題は科学委員会と総会の関係である。どうも、IWC 総会に参加している人、あるいは参加したいと考えているオーストラリア、ニュージーランドなどの環境 NGO は総会で「正義」を論じたらしい。もちろん、科学者は「正義」とは無関係だから、科学委員会の結論を総会が無視して、そこで合意できる「正義」に従って、科学委員会とは異なる結論を出しても構わない。科学者として私はそう思う。そうならば、まともに、世界全体で合意できる「正義」について、本当にしっかり議論してもらいたいと思う。それができる自信があるならば、偽善者ぶって「科学」委員会を IWC 内に設ける必要などないだろう。政策的合意というのは、「科学」が自動的に決めるものではない。それを決める人たちの世界観や信念によって決めるべきものである。だから、IWC 総会は、しばしば科学委員会の結論を無視することができたのである。しかし、それには、大方の人々を納得させることが前提である。「私たちは科学委員会の結論を無視するが、それにはしかるべき目的ないし理由がある。その目的は普遍的に受け入れられる正義に合致する。」と言わなくてはならない。

ところで、「普遍的に受け入れられる正義」というのは極めて厄介で危険なものである。私の発言は急に話が関係なさそうなところに飛んだ。現在、世界が関心を持っているのは「イスラム国」の問題だろう。私は、是非、マスコミ・ジャーナリズムの人に調べてもらいたいことがある。彼らの関心は、戦火におわれるかわいそうなかわいそうな人の映像を撮ることだったり、戦いの場面を報道することにあるのだと思う。私は、危険を冒してそういう映像を撮ってきてもらいたいとは思わない。戦争に巻き込まれた庶民とりわけ子供・老人などの弱者が悲惨な状況に置かれるだろうことは容易に想像できる。そんなものを今更写真で紹介してもら必要はない。かわいそうな人の写真を掲載して、正義ぶって紙面の販売の向上をはかりたいという、マスコミ人の偽善を最も憎む。もっと大事なことは、「イスラム国」がなぜ成立しているのかを考えることだろう。イスラム国はそれなりに資金源を持っているようだ。また、世界各国から志願兵が参加している。表に出なくてもかなりの数の支持者がいるということだろう。何故、彼らがイスラム国を指示するのかを考えなくてはならない。ある程度金を持っていて、渡航費を自弁して参加するのだから、各国の最貧困層ではない。少なくとも比較的底辺に近い中産階級だろう。彼らの現実に対

する不満は経済だけではない可能性が高い。社会そのものに対する不満かもしれない。欧米社会そのものに対する不満であれば、それは欧米社会で普遍化されている「正義」そのものに対する不満だろう。彼らは、文化財を破壊したり、奴隷制の正当性を主張したり、人権を無視して人質を殺害したりする様子をネットで見せつけている。彼らは、ことさらに欧米社会に普遍化されている「正義」に反発しているように見える。私は、イスラム国の政策を決定しているトップレベルの人間ではなくて、底辺を支えている人々の心理を考えている。つまり、彼らは「普遍的な正義」に反発しているのである。はたして、では「普遍的な正義」の方は、自らの正当性がどのようにして与えられたと考えているのだろうか。

グリーピース等で反捕鯨運動を行っている諸兄に問う。諸兄の主張の正当性の根拠はどこにあるのか。「欧米では皆そう言ってます。」などという小学生並みのふざけた答えをしないように。